

き、信廣も決起して東征西伐を爲し、終に上國に終老せるを思へば、松前の晩く開けしを知る、龜田八幡宮の神主藤山長門の家記に、蠣崎若狹守光廣、上の國より相原周防守居城址へ移る、應永十五年云々とあるは、相傳の誤にて、實に松前の扨て開けしは、明應五年、相原周防守の子彦三郎季胤、村上河内守政善始て松前を守護せるより、著姓の人茲に居る事と成ぬと見ゆ、此は下國定季が、其子山城守經季の放縱なるを以て誅せし其事により、經季に黨し動亂を作さんとするものなど有により、季胤政善に命じて鎮撫せし一時の機策より起りし也、實に松前に豪姓の居を奠めしは、永正十一年三月、三代若狹守義廣、上國より茲に移しを始とすべし、松前の系譜に、二代若狹守光廣、康正二年、三代若狹守義廣、文明十一年、四代若狹守季廣、永正四年、皆松前に誕すと記たり、康正二年は、始祖信廣初て渡海せしより三年に當れば、松前に落魄せし間に生れたりともせん、文明十一年は、光廣上國にをり、永正四年も、義廣上國に住ぬ、父は各上國に在て、其子松前に生る、も如何なるべし、且松前舊事記に、永正十年大館合戦、松前の守護相原季胤、村上政善自刃と書たれば、其頃までは、此二人大館に戍衛せし事明かなれば、いよく光廣義廣は、永正十年已前は、松前に在ざりし證とすべし、翌十一年三月十三日、義廣來て松前を鎮せしは、二人戦死の後代りて大館に在しなるべし、義廣松前の大館に居こと久しく、其孫伊豆守慶廣に至り、慶長五年、福山に營を築きしより、累世裘業を嗣ぎ、雄藩たりしに、文化四年より文政四年までの間、松前蝦夷悉く官に收たまひぬるに、又復故し、今の伊豆守に至り、特旨を欽て新に金城を築き、萬世不朽の基礎を固め、永く北地の藩屏たるは、まかしながら官の御明斷により、此盛舉は有し也。

〔笈埃隨筆〕松前

松前城下といふは、後に山を負て前は海也、東西家つゞき建つらねて、壹里計り有、城は壘にて、二の櫓あり、大手の兩側は家士の町也、城下の三ヶ所に高札を建たり、